

新潮文庫

紀ノ川

有吉佐和子著



新潮社

かわ 紀
川 ノ き



定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草 132 A

昭和三十九年六月三十日 発行
昭和五十一年十一月二十日 二十三刷

著 者
有吉 佐和子

発行者
佐藤 亮一

発行所
株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六五一一
編集部(〇三)二六六五四二一
振替 東京四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信保宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

紀ノ川

有吉佐和子著



新潮社版

1644

紀

ノ

川

第一部

今年七十六歳になる豊乃とよのは、花はなの手をひいて石段を一步一步、ふみしめるように上って行った。三日前から呼びよせてある和歌山市の髪結女の手で、彼女の白髪も久々で結いあげられていた。小さく鬢びんを張り、髻たばもその齡には珍しく大きく出ている。若い頃の黒髪はさぞ見事だったろうと偲おもはれるほど、白くなった今も髪は多くて艶を失っていないのだった。小紋の重ね着という盛装で孫娘と手をつなげば、石段を上るにも手をひかれる齡が逆に花の手をひいているように見えるのである。それは紀本きもとの大御おおみっさんと呼ばれる貫禄くわんろくというものであり、花が紀本家を出る今日、豊乃に何かの決意があるからでもあった。

早春の九度山は、朝霧に包まれていた。花は左手に祖母の強い力を感じながら黙って石段を上りきった。髪は高島田に艶やかに結いあげ、濃く白粉を刷いた顔は心もち上気して匂うようであった。縮緬の振袖は明るい紫で、胸許むとぎに宮迫みやせきの飾りかんざしが長いびらびらを振りあわせて鳴っている。その小さな音が聞こえるほど、花も緊張しているのであった。生れて二十年育った家から、他家へ縁づけば花はもう紀本家の者ではない。豊乃の掌は孫にそう教えようとして、それを

強く惜しむ祖母の心をも同時に伝えていた。

慈尊院の住職は、前日から聞いていたので弥勒堂の前に立って出迎えたが、これはあらたまつた装いではなかった。御経をあげて頂くのではないからという断りが前もって来ていたのである。彼は大檀家の大御っさんに鄭寧に頭を下げると、

「今日はお芽出とうさんでございます」

まず祝儀を述べた。

「おおきに有難うございます。えらい早うにから伺いまして、ご免なしてよし」

豊乃は鄭重に礼を返した。住職は拝堂をあげてあるから、御用があれば手を叩いてお知らせ下さいと云いおくと、北側の庫裡に姿を消した。孫と二人だけにしてほしいという伝言を承知していたからである。

豊乃は僧を見送ってから、ゆっくりと孫娘を振り返った。かなり上背のある花を見上げて豊乃は満足げに肯き、弘法大師の御母公を祀る靈廟弥勒堂の前に伴って行った。

「高野山にはの、女は入れえへんがのう、この慈尊院までは上れるんやしてよし。そやよつてに、ここは女人高野と云うんやして。花は知つてたわの」

「はい」

「祈親上人さんちゆう偉いお方の夢枕にお大師さんが顕われなして、我に十度礼せんよりは我が母に九度拝せよとおっしゃったんは知つてたかのう」

「はつきりとは知りませんんだよし」

「お大師さんがほいだけお母さんを敬われたと知れば、女ちゆうたかて阿呆やつてええ筈ないと

思わんならんわの」

「そうでございますのし」

豊乃は静かに合掌して眼を閉じた。花も做なつて手を合わせたが、廟の前の柱にぶら下っている数々の乳房形に気がつく、しばらく瞑目することを忘れていた。それは羽二重で丸く綿をくるみ、中央を乳首のように絞りあげたもので、大師の母公と弥勒菩薩を祀る靈廟に捧げて安産、授乳、育児を願う乳房の民間信仰であった。実物大の大きさのものをから徑一寸ほどの雛型まで、柱の上の方に沢山吊り下げられてある。まっ白な新しいものが二つ三つある他は、どれも雨風にうたれて古び黴くさんでいた。幼い頃から見慣れていたものなのに、この日殊更のように花がそれに眼を奪われたというのは、花の母親が花を身ごもったときそうしたように、豊乃も何十年の昔に花の父親を生むときそうしたように、花自身もまた近い将来そうするであろうと考えたからである。市の和歌山高等女学校で女大学おんなだいがくを学んだ花は、結婚の意義と女の役目の一つは子を生み家系を保つことにあると信じていた。産後の肥立ち悪く逝った母親に替って花を育てた豊乃が、孫娘が嫁ぐ日二人きりで慈尊院に参ろうとした理由が分るような気がして、花は静かに瞑目した。まだ処女おとめでいる彼女に、今この廟の前で願う言葉はなく、傍の豊乃に心を併せようとだけしていたのである。

「お住じゆうさんがあない云うておくれやったよって、あちへ上らして貰もらおかいの」
「はい」

豊乃と花は開け放たれた拜堂に上って、祭壇の前の畳に坐って再び合掌した。右壇には弘法大師の御影みかげが、左壇には御母公の御影が飾られてある。ともに大師の直筆と伝えられている。高野

山に籠った大師が池水に自らの姿を映して描いた自画像と、御母公逝いて後弥勒菩薩になられた靈夢を見て追孝菩提のために描かれた曼陀羅である。この由来を、花は慈尊院の住職からでなく、花の殆んど総ての知識がそうであるように、豊乃の口からきかされていた。

「もうの、何を云うこともないけどの」

ここでは形式的に拝礼した豊乃は、花を省みると呟くように小さい声で云った。

「駄だけは大事にしないや」

「はい」

「遠おい処へ嫁くんやよって、私もあんたの顔をちょいちょい見せて貰えんと覚悟してるんよし。何を云うことも無うても、こないして二人だけになりとうての、一緒に来てもうたんえ」

この朝から、豊乃の言葉遣いは日頃と違って優雅で鄭重なものに変わっていた。聞きようでは他人行儀とも聞こえ、早くも花を他家の人と見做しているかとも思われたが、盲愛してきた孫を手放す豊乃の寂しさとも聞きとれた。黙って見詰めている祖母の視線を額に感じながら、花も黙ってそれを受け止めていた。

幼い頃から花を、片時も傍から離すまいとしていた祖母の愛情は強烈であつた。紀本の大御っさんは、息子の信貴さんも孫の雅貴さんも氣に入らんとからに、孫娘の嬢さんだけ可愛がつてなさる。あの分や婿とって分家させる心算や分らんで、などと噂されていた。雅貴と同じようにその妹の花を和歌山市に数年住まわせて、そのころの女には珍しい高い教育を受けさせたときも、豊乃は一緒に花と暮すために不馴れな町住いをしたものである。大御っさんはやっぱり嬢さんに婿とる氣や、ほや無うてなんであない女学者のよな学問させるもんでよ、と云われたものだ。自

分が家つき娘で婿とったよって、嬢さんにもそないさせるつもりやろかい、いづれ三国一の婿さん迎える気やろかい、なんせ紀本の嬢さんは器量よしで利発で云うとこのない人柄やけの、と誰もが肯いていた。事実、豊乃自身その気が十分あったようである。若く死んだ花の母親水尾が、姑である豊乃に気をかねて小さくなって暮していたのを彼女は覚えていた。花に水尾の真似はさせたくない。一人娘に生れて育った豊乃は、自分が受けたような教育を花にほどこすことよって、花を豊かに成長させたいと願ったのだ。紀州の名家である紀本の家系が、その名のとおりに花よって花ひらいたと思えるように、花は美貌を備えていた。そして豊乃の願望に応じて賢く育っていた。茶の湯も奥儀を極め、書を能くし、筆も免状をとり、豊乃の躰に言葉遣いも礼儀も正しい分別を心得ている。家柄に加えて、右の通りならば、もう付け足すべきものはなかった。紀本家のある九度山村、隣接する慈尊院村以下、元官莊府莊内の村々から降るように縁談があったのは当然である。

だが、どれにも豊乃は首を横に振った。彼女の口から花に婿をとって分家させるという言葉は出なかったが、縁談のある度に豊乃は何かと難癖をつけて退けたのである。主な口実は、望む家の格が低いということであった。高野山政所のある慈尊院村の旧家である大沢家から次男の嫁にと望まれたときは、豊乃の妹が嫁入った先だから従兄弟の子供同士で血が濃すぎると、理由にならぬ理由を云いたてて反対した。紀本家の当主である信貴は、温厚な人柄で孝心篤く、豊乃に完全には押えられている形なのだった。豊乃の反対を押しきる強気はなく、では花に婿をとるのかと訊き返すのも控えていた。

紀州 紀ノ国 木は多て

嫁をとるなら 花咲かしよ

九度山 一番 紀本の娘

こんな毬つき唄が唄われていた。節は前からあったし、文句も大体昔から伝わっていたものを最後だけそのときどきで変える習慣があり、子守唄がわりにもつかわれていた。豊乃が娘のころは伊都郡もずっと東の大和に隣接する隅田ノ荘に美女がいたらしく、嫁をとるなら花咲かしよ、隅田ノ荘一番さかえさん、と唄われていたものである。さかえというのは美しいと云われている娘の名前であった。勝気で我儘に育った豊乃は、この見たこともない娘に嫉妬を覚えたものだ。豊乃もかなりな美貌だったのだが、隅田ノ荘のさかえを退けるほどには美しくなかったらしい。その昔の口惜しさを孫娘が取返したのだ。豊乃が花にかけた願いは大きかった。徳川さんから貰いにきやれても滅多には渡さんぞという強気であったが、実際にはどうするのか彼女自身も方針はたてることができぬままに花を溺愛していたようだ。その内に毬つき唄は九度山のあたりだけでなく伊都郡全体に広まっていた。

明治三十年、花が二十の誕生日を迎えるころ、いつとき下火になっていた縁談が二つ同時に起った。

一つは昔隅田ノ荘を領していた、今は豪族として名家に数えられている隅田家の新家から紀本の遠い縁戚に当る丹生家を通しての申込みである。隅田ノ荘のさかえさんは美しくて家柄の娘ではなく、隅田家に仕える小者の女になったが、花は隅田一族から迎えられたのだ。

「もう花も婚期に晚い^{おそ}というても決して早いとは云えん齡ですよって、お母さんも賛成しておくれなして」

と信貴は慎重に、しかしこの度はかなり高圧的に豊乃の意向を訊した。十四、五歳で嫁入りしても世間是不思議と思わぬ時に、十八の盛りをすぎれば花の年齢は親にとって不安を感じさせるのであった。もう強情は張らせない、豊乃の愛情で花を不幸にするわけにはいけないのだと言外に意味は強かった。

だが、豊乃は反対したのだ。

「隅田^{すだ}はんはんに花はやれまへんな」

「なんです」

「なんでて考えておみ。紀ノ川は東から西へ流れてるわの。紀本から隅田^いへ行たら西から東で流れに逆らうちゅうもんや。紀ノ川添いの嫁入りは、流れに逆ろうてはならんのやえ。花は隅田はんにやりまへん」

「そんな阿漕^{あこぎ}おしやつたら困りますな」

「阿漕やないえ。私のお母さんは吉野^{よしの}からこの家に來なした。あんたらのお母さんは大和^{やまと}から嫁入りしてきたんえ。みんな流れに沿うて來たんや。自然に逆らうのは何よりいかんこっちゃ」

「そんなこと云うて、いつまで花を嫁にやらなんだら先行きどないことになりますんや。それは考えていなさるのか」

「ああ、考えてますわいな。花は真谷^{また}へ嫁にやるんよし」

すらりと云い捨てられて、信貴は啞然としていた。紀ノ川のずっと下流にある海草郡^{いさか}の有功村^{むら}

字六十谷の真谷家からも、隅田家と同時に花を貰いたいと、これは竜門の北家を通して申込んできていたのだ。

紀本の嬢さんは六十谷にいくんやとし。噂は数日を経ず近隣一帯の村々に知れ渡った。六十谷へ、なんでやね、と不思議そうな顔をする者たちがいた。紀ノ川に限らず河上に棲む者たちには上に居るといふ矜持があったのである。海草郡は、紀ノ川の下流もかなりの下にある在所であった。村の格から云っても官省符ノ莊九度山とは段違いに下る。まあ真谷家は六十谷で一番の名家であり、本家の後つぎの嫁に望んできたのだから、家柄に難のつけようはないが、それにしても紀本の嬢さんが興入れする相手ではないと誰もが思ったのである。

信貴も紀本家の当主として豊乃に反対すべき義務があった。

「そらお母さん、無茶いうもんですわ。隅田はん断るのと真谷へ嫁にやるのと話は別になしてよ」「あたりまえよし。隅田はんに関係なく花は真谷へ縁づけるんやして」

「ほな別々で考えまひよな。真谷はんやったら、これまでの縁談断りなしたと同じ理由で断らななりまへん」

「なんでよし」

「家の格が、ずいと低いやおませんか」

「なんでよし」

「なんでよし、九度山と六十谷と較べただけでも分りますがな」

「信貴さん、あんたも若いに古いこと云うわして」

紀本家は親も男子をさんづけで呼ぶ習慣があった。豊乃は息子を古いときめつけ、花を嫁にや

る相手は家の格ではない、男だ、と云い切ったのである。

「息子も娘も和歌山市に住まわせて教育受けさせたあんたが、真谷の敬策さんの名知らなんだとは情ないの、東京の専門学校出なして早うにから太兵衛はん助けて村役場の助役やってなさった。二十四の今で、早や村長さんや。紀ノ川添いを見渡して、この伊都郡にも隣的那賀郡にも、これだけの婿さんはいてえへん。家柄やの家の格やのは大黒柱の男あつてのことやしてよし」

こう云われてみれば、信貴には一言もなかった。彼も九度山村の村長を勤めていたから、真谷敬策の名前は新進気鋭として聞き知っていた。が、どうであれ信貴としては隅田一族を親類とする方が一ヵ村の村長にすぎぬ真谷敬策を婿にするよりは好ましいと思われた。豊乃に対して温順であつた信貴は、この事に関して珍しく母親の言葉の前で楯をついた。

「川下から上へ嫁入るのが流れに逆ろて悪いんやったら、川向うへ嫁入らせるのも水で縁切るちゆうて悪いと云いますやろ。新家が妙寺から嫁もろて、えらいことになったしてよし」

豊乃の叔父が紀本の新家をたてて、その息子に川向うから嫁をとった途端、家運が衰え一家悉く死に絶えた話を例にとつて、信貴は喰い下つたのだが、

「そら妙寺から九度山へ嫁に來たよつてあかなんだのや。万葉にある妹背山の歌を信貴さんも知つていよ、背山は加勢田ノ莊にある。その向いっ側に妹山がある。いうたら紀ノ川の此方は女で彼方が男や。新家は逆やつたよつてにあないなことになったけどの、妹山のある岸から背山へ嫁げば、なな障りがあるもんで、え」

理屈は豊乃が一枚達者であつた。いや、理屈の筋は通らずとも豊乃は相手を屈服させずには措かない女だつた。

文政五年生れの豊乃は、何かというと明治維新を持ち出すのが口癖だったが、このときも最後はそれが出て、

「世の中は封建制度から郡県制度に変わったんやしてよし。女が他処に出るに、ななうるさいことがあるもんで、え」と結んだ。

信貴はそれでも諦めきれずに秘かに花を呼んで、直接娘の希望を訊したが、疊にのの字を書くような不健康な教育を受けていなかった花は、つぶらな眼で父親を見詰めたまま、

「隅田よか六十谷の方が和歌山市に近うございますのし、私は真谷さんへ嫁きとおます」と答えたものである。

花の付人である徳からこの情報を得たとき、豊乃は天井を向いて、ふおッ、ふおッと腹の底から噴き上げるように笑った。和歌山市で過した数年間が花にとって無駄でなかったことが嬉しいのであった。真谷敬策の名を、花も知っていたのに違いないと豊乃は知って、自分の孫だと満足していた。

こうして、女方が強く望んで真谷家の申込みを享けたのであったが、結納を交してから二年近い歳月が結婚の準備として予定されねばならなかった。豊乃は花と徳を連れて京都へ出かけ、嫁入道具をあつらえ、桶櫛も帯も振袖も念を入れて注文した。京塗りも手間を省かぬ上等の品は、地塗りから仕上りまでに一年余りかかるのである。塗鴉籠、箏、鏡台、間簞笥、塗りの質から蒔絵の図柄まで細かく豊乃は指図した後、茶は裏千家、花は古流の家元へ、花を連れて挨拶に廻った。それまで万事に地味で、家計を締める立場にいた豊乃の人が変わったような派手な振舞に、信

貴は呆然として、娘三人持てば家が持たんちゆうな、ほんまやなあと嘆息した。家つき娘であつた豊乃は、孫娘の嫁入りを自分の分も重ねて盛大なものにしようと思ふていたのである。

「花と一緒に暮すのもこれぎりや」

と云うのが口癖になつて、京都の滞在も三月の余になり、名利、庭園を毎日見て歩いた。竜安寺のつくばいで、見事な紅葉を見たときは、感嘆しながら花を振り返つて、

「結構なもん見させて貰うたえ」

と喜びを感謝で表現する豊乃であつた。

「私の勝手で婿さんを待たしてしもた。二年待たせた私も私やが、文句云わんと待つておくれた敬策はんは、私が見込んだ通りの大物やつたらし。花も安心して嫁きや」

豊乃はしみじみと云うのであつた。花を嫁にやるときめてから二度の豊かな秋を過して、彼女はもう思い残すことはないと自分に云いきかせているのもあつた。

「はい」

花は、両手を仕えて頭を上げた。高く結つた島田の髷を、豊乃はしばらく眩しいように見詰めて、やがて顔を上げた花の衿もとを正してやりながら、

「ほんまに、可愛らし」

眩く豊乃の眼は潤んでゐる。花も眼のふちに涙を湛えて息をつめていた。

何を云うこともないのだと豊乃は云い、その通り何も云わなかつたのに、豊乃が生きた歳月と花の年齢とが完全に結びあわされていた。紀本家を永遠に離れて、豊乃とは一つ墓に入ることのなくなった花が、家の絆を離れて女で祖母に結びあつたのである。